

明治後半における教育と文学

—「田舎教師」の時代—

ヴァン・ロメル・ピーテル

はじめに

明治後半の日本文学の名作を何編か列挙してみれば、教師や学校がよく登場するという特徴が顕著である。国木田独歩の「酒中日記」(1902・明治35年)や島崎藤村の『破壊』(1906・明治39年)、夏目漱石の『坊っちゃん』(同年)、石川啄木の「雲は天才である」(同年)、田山花袋の『田舎教師』(1909・明治42年)などは、すべて教師を主人公とする小説である。より正確に言えば、これらの小説は孤立した地方の学校で教鞭を執った「田舎教師」の困難とフラストレーションに注目し、退職や死亡で終わる地方教員の悲劇を描写した作品である。

明治30年代と40年代にこのような文学作品が数多く執筆されたのは、偶然ではない。初等教育の急拡張期であった明治後半には、日本の津々浦々に学校が設置され、公教育の拡大によって「田舎教師」という新しい職業階層が形成された。その「田舎教師」群が出版界と日本文壇に大きな影響を及ぼしたと思われる。

しかし、明治後半における教育と文学の関係を究明しようとする研究は極めて少ない。上に挙げた小説の教育史的な背景に触れる作品論はあるが、一つの作品を超えて教育と文学を包括的に論じる試みは見られない。出版研究は地方の小学校教員を新しい読者層として捉えた。永嶺重敏が論文「田舎教師の読者共同体」で指摘した通り、明治後期の小学校教員は、「労働者・農民や中間層が大衆読者として登場してくる」大正時代に先立ち、「学生生徒を別にすると、(…)明治以後マスとしてもっとも早く形成された読者階層であった」¹。しかし、永嶺は地方教員の文学読書習慣を分析しなかった。和田敦彦は『読むということ』と『メディアの中の読者』に収録されている論において、明治末期に流行した「教育小説」という教師向けの文学ジャンルを論じることで教育と文学の関係に注目したが、そこで扱った作品では日露戦争以後の強力な国家主義との関係ばかりが注視された傾向があるため、教育と文学の関係が限定的かつ否定的に位置づけられている²。そもそも初等教育と文学との関係は、小学校教師は文学への理解を欠くか、健全な道徳的なものしか読まない、という軽蔑的ないし一方的な思い込みで片づけられる傾向が今日まで支配

的である。

明治後半における日本文学の形式と役割の変遷を理解するには、急速に拡大した教育との関係について研究することが不可欠であるが、本論はその研究の第一段階として、「田舎教師」群を明治後期に発生した新しい文学読者層として位置づける試みである。教育史研究と出版研究と明治後半の大教育雑誌『教育界』を主たる資料とし、地方の小学校教員の歴史的な背景と実態を明確にしなが、中間知識人として社会の周辺に属するこの教師たちの文学受容を明らかにすることで、この文学読者群の重要性を説く。

1. 「田舎教師」という新たな近代職業階層

明治時代に新たな教育制度が発足したことによって、公教育が急速に拡大し、学校教師という新しい職業階層が発生した。特に明治後半に就学率とともに教員数が急増した。学齢男女児童就学率は1892・明治25年(55%)から1907・明治40年(97%)まで上り、小学校教師の人数は同じ15年間を通して59,796人から122,038人まで倍増した³。教職の専門化を図る文部省は、明治20年代に設けた各県に師範学校一つという制限を解消し、明治30年代から師範学校を増やした。1889・明治22年から1898・明治31年まで師範学校数は47校であったが、1912・明治45年には既に86校まで増加した⁴。師範学校の卒業生は必要とされた大勢の小学校教員の一部を補ったが、その数だけでは足りなかったため、高等小学校や中等教育機関を卒業して小学校に就職した若者も多かった。

「田舎教師」層を形成して、日本の津々浦々に散在した小学校教員という集団は一般に、中等学校以上まで進学して立志を実現することができなかつた「敗者」として位置づけられている。若者は明治30年代から、初等教育拡大のおかげで、ますます高等小学校に進学できるようになったが、高等小学校以降の進学は可能性が非常に制限されていた。中学校数は増加したが、高等小学校卒業者を全て受け入れられる程ではなかつた。具体的な数字で見ると、1895・明治28年から1905・明治38年まで高等小学校卒業者が毎年平均1万人ずつ増えたことに対して、中学校入学者は同じ時期に毎年平均1500人ずつしか増加しなかつた⁵。

結果として、立身出世を夢見ながら進学できない若者が毎年急増していった。これらの若者の多くは平民、ことに農民出身であったが、農業や家業の手伝いまたは別の仕事をしながら、進学の夢を抱き続けた。その中には、自宅学習や特定の先生に就いての学習、私塾の通学、通信教育による学習、小学校補習科あるいは私立普通学校への通学というような様々な形で勉強を続けようとした者もいた。このよう

な高等小学校以上の教育を受けた中間知識青年群にとっては教員不足に直面する地方の小学校が重要な就職先であった。中学校への進学を断念し、二次選択として師範学校に入学して小学校教員となるというパターンは明治後半の師範学校入学生の特徴であったが、師範教育を受けずに代用教員となる者も多かった。高等教育機関への進学や就職困難に突き当たった中学校卒業生もが小学校教員となることも少なくなかった⁶。かくして、小学校は「挫折した青年の収容所」あるいは「フラストレーション地帯」として描写できる状況にあったとされる⁷。

負け犬としての地方教員像は現代の教育史研究者による位置づけだけではない。そもそも小学校教員に対する批判的ないし否定的な眼差しは明治半ばから発生した教職の近代化の結果としても理解できる。明治前期には教職が武士に相応しい聖職として見なされたが、明治後期には平民、ことに農民が果たす職業となった。明治前期の小学校教師は村長と並んで村の権力者であり、利益でなく知識の伝授と人格形成を教育の目的とし、広く尊敬されたが、明治後期の教師は村長に雇用され、月給のために働く人物に過ぎなかった。さらに、明治初期の土族教師の教育は唐澤によって「自由奔放な教育」と呼べられた。各教師が自分でカリキュラムや教授法、生徒を定めたのである。中央当局によって決められたカリキュラムと検定教科書を中心とし、教師をヒエラルキーの底辺に置く近代教育とは正反対であった⁸。

こうした教職観の変遷に従い、明治後期に教師と校長を批判的に描写する風潮がメディアを通して広まり、文学にも表れた。国木田独歩の「酒中日記」や夏目漱石の『坊っちゃん』、田山花袋の『田舎教師』では教職に対する軽蔑的な発言を読むことができる。たとえば、「酒中日記」では、主人公の校長が次のように妻に罵られる。「学校の先生なんて、私は大嫌いサ、ぐずぐずして眼ばかりパチつかして居る処は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ」⁹。このような風潮の中で教師自身も自己の職業を卑下するようになり、自尊心を喪失していった。

しかし、「田舎教師」群を近代日本の公教育制度が生み出した「敗者」と位置付けるだけでは一面的であり、明治後半における教育と文学との特別な関係の理解にも至らないと思われる。小学校教師は中等教育レベルの知識人として中流知識人に過ぎないとはいえ、識字率がまだ低い明治後半においては地方の知的なエリート層を形成した。たとえば、師範学校が二次選択に過ぎなかったとは言っても、入学志願者の人数が多く、競争率は非常に高かった。明治30年代と40年代は志願者数が入学数の4～5倍にも増え、師範学校への入学が厳しい時期であった¹⁰。師範学校の利点は学費が支給されることと、地方にあっては比較的に高く位置づけられていることであった。そもそも尋常小学校卒業者のうち5分の1ないし5分の2しか高

等小学校に進学できなかった明治後半には、中間教育を受けた教師たちが地方ではまだ優秀な存在と見なされていた¹¹。高等学校と大学の卒業者が形成した全国のエリートより下、尋常小学校の義務教育しか受けなかった人々より上、という中間的な地位こそが「田舎教師」群の特徴であり、彼ら大勢の教師たちは近代職業層と近代読者層を形成したのである。

さらに、「田舎教師」層については画一的な青年教師層ではなく、多様性も指摘しなければならない。明治30年代からは教員に対する法制的な整備によって小学校内の教員階層が一段と複雑になった。小学校教員の種別を以下に整理しながら、文学作品がその内のどの種類の教師に注目したかを考察したい。

2. 本科正教員・准教員・代用教員・老教員・女性教員

小学校の支柱は本科正教員であった。正教員は師範学校卒業者と小学校教員検定試験に合格した教員からなっていたが、師範学校卒小学校教員の地位の方が検定試験合格者より高かった。正教員、ことに師範卒の教員は小学校のヒエラルキーで最も高い地位を占め、高学年を担当し、給料も最も高かった。小学校長になるのも正教員、ことに師範学校卒業者であった。

正教員の下には准教員の試験を受けた准教員と無資格の代用教員がいた。師範学校卒の「田舎教師」を社会の周辺に属する人物として位置づけるならば、准教員と代用教員はさらにその周辺に属したと言わなければならない。准教員と代用教員の仕事は、当人たちにとっては進学か、より良い仕事を得る機会が現れるまでの一時的なものだったが、その機会がなければ長引いた。その場合、教師は自宅勉強をして検定試験に挑戦したり、師範学校や県が行う講習に参加することで、自分の地位を改善することができたが、師範学校卒業者と同じレベルまで昇進することはできなかった。正教員との区別は低い月給にも反映されていた。

藤村や啄木、花袋の作品や教育雑誌に載せられた教育小説がこうした准教員や代用教員を主人公とすることは顕著である。つまり、田舎教師の中で最も地位の低い教師が文学の中心となったのである。また、学校のヒエラルキーから生じる摩擦、ことに師範学校卒教員との対立は重要なテーマの一つであった。師範学校卒の教員に対する准教員と代用教員の批判的な眼差しが教育小説では頻繁に表される。

「田舎教師」といえば青年教師のイメージが一般的であるが、明治前半には多くいた国士老教師も小学校教員の一部として指摘すべきである。教職の専門化はこうした老教師を周辺に追いやることになった。小学校に残る老教員もいれば、私塾を開いて町村の子供を教える者もいたが、社会の尊敬は衰微していた。かつて武士

として上流階級に位したものの、今では時代遅れとなった人物は数は多いとは言えないが、文学の主人公にもなった。老教員の脱落と悲劇を描く小説の例としては、雑誌『教育界』に掲載された独歩の「富岡先生」（1巻9号、1902・明治35年7月）が知られているが、同じ『教育界』に載せられた北鷗の「島の先生」（2巻9号、1903・明治36年7月）も、小さい島の小学校で教える老教員が自分の周延的な存在の価値を探り、その内面を描写した短編小説であり、より建設的な仕方と同様な問題を扱った。つまり、明治30年代の「田舎教師」層は近代的な若者だけでなく、明治初期の生き残った教師も含む。ちなみに、漱石の『坊っちゃん』の「元は旗本」¹²である坊っちゃんという登場人物もある意味ではこの部類として見ることができ、アイロニーを込めて、武士的な出身で自分の行動を正当化する教師をパロディ化したとも考えられる。

最後に女性教員の登場にも注目する。明治の新教育は女子も教育の対象としたが、概して初等教育に限られた。師範学校は女性にとって数少ない進学先の一つであったが、師範学校と女子の中等高等教育機関の数が少なかっただけではなく、女子を学校に行かせない封建的な風潮も問題として残り、女子教育に制限をかけた。小学校の女性教員の数は、明治30年代から徐々に増えていったが、特に日露戦争後から増加が顕著となった。明治40年代には小学校教員の約25%にまで女性教員が増加したため¹³、女性教員に対する賛否両論が高まり、女性教員が文学作品にもよく登場するようになった。しかし、文学作品においても女性教員に対する消極的ないし軽蔑的な傾向が支配的であった。花袋の『田舎教師』や啄木の「雲は天才である」では女性教員は背景に現れる人物に過ぎず、女性の視点から内面を描写する試みはない。また、明治40年前後『教育実験界』に掲載された教育小説にも女性教員が登場するが、女性教員を「問題」として捉える小説が多かった¹⁴。

3. 「田舎教師」の日常生活

以上に「田舎教師」を近代職業層として位置づけ、教員という職業の内部の階層に注目しながらどのような教員が文学作品の題材となったかをいくつかの例で示した。しかし、明治後半における教育と文学の関係は、地方教員が文学の新たな題材となったことだけではなく、その教員が文学を読む新たな読者層を形成するようになった側面もある。教師たちにとっての文学の意味と役割を理解するために、彼ら・彼女らの日常生活をより具体的に明確化する必要がある。「田舎教師」である明治後半の小学校教員が直面した経済的な困難を徹底的に論じてきた教育史研究の成果を参照しつつ、ここでは雑誌『教育界』を主たる資料として、当時の教員生活を

きるだけ具体的に描いてみたい。『教育界』は地方教員の存在に特別な注意を払い、彼らの人気を集めた明治後半の大教育雑誌であったが、特に教員の投書を多数掲載した『教育界』の投稿欄を検討することによって、小学校教員が経験した苦難を明らかにすると同時に、教育雑誌と文学がその苦難の共有を可能にし教師たちを支える役割を担っていたという重要性を以下に明らかにしていきたい。

一般に小学校教員の生活は既に明治前期から経済的に余裕のあるものではなかったが、物価が上がり、社会的地位が下がり続ける明治30年代に、教員の待遇は大きな問題となり、たとえば『教育界』の投稿欄で最も話題となった論点であった。1902・明治35年5月に、三重県の「赤水生」が以下のように教師の生活水準の低さを訴えた。

車夫馬丁と雖も日々營々以て子孫の計に余念なきものゝ如し、然るに小学校教師には是丈け興ふるに於ては食ふことを得べしと、如斯は無妻独身禪宗の僧侶的生計を營むべしとの意味に候哉、世の識者に就き御尋ね申上候。¹⁵

小学校教員の給料を負担したのは市町村であった。都会と違い特に貧困にあえぐ農村地帯は教員の給料が低く、月給を毎月きちんと払わない場合も例外ではなかった。地域間及び学校間の差異が大きかったため、多くの教員が地位のより高い、給料のより良い学校への転勤を目指した。日露戦争後も小学校教員の転職が激しく、実業に転じる教員が多かったが、それは実業がブームだったのではなく、経済的な必要性のためであったと指摘されている¹⁶。「生活は実に簡単で、従ひて無味所謂動物的生活であります」¹⁷や「先生は骨と皮にて作り人を教うる道具なり」¹⁸というような叫びが限界に近い生活をしてきた教師たちの困難を表現した。

小学校教員の生活をより具体的に知るために、雑誌『教育界』が1905・明治38年に行った調査が非常に参考になる。『教育界』は読者の生活費に関する収支計算書の明細を募集し、『教育界』第4巻、1905・明治38年1月から10月まで、ほぼ一年間を通して58件を掲載した。最初は校長ばかりが一か月の収支見積を投稿したが、次第に教師たちが、恥を忍びつつ、お互いに刺激されて続々と自分の生活費を報告するようになった。調査から分かるのは次の通りである。師範学校を卒業し校長になった教師は、給料が20円以上であったため、それほど苦勞しなかった。師範学校卒の正教員は、地域と年齢に応じて、12円～20円の給料をもらったが、これでは特に家族が大きい場合、余裕がなかった。月給10円前後の准教員や代用教員はなくてはならない生活必需品以上のものを入手することができず、露命をつなぐだけの生活を送っていた。

『教育界』に58人の教師が投稿した生活費報告から二つを例として挙げる。一つ目は1897・明治30年3月に師範学校を卒業して「山間僻地の学校へ任命」¹⁹された長野県の小学校教員が報告した生活費である。

収入	月俸	16 円
支出	下宿料	6 円
	図書費（新聞雑誌共）	2 円
	交際費及諸会費等	1 円 50 銭
	臨時費	1 円
	衣服費	2 円 50 銭
	計	13 円
差引残金	計	3 円

「長野市某尋常高等小学校訓導某君」の生活費投書（『教育界』4巻4号（1905・明治38年2月）98頁）を執筆者が整理した。

教員が投書で追加説明する通り、月給16円で一人暮らしの下宿生活をしていた頃は、毎月2・3円は貯金できたが、翌年（1898・明治31年）妻を迎えたら、貯金できる余裕がなくなった。1899・明治32年には2円の増補をもらったが、1900・明治33年に子供ができたため、月給18円で再び貯蓄もできなくなるがなんとか借金もしないというぎりぎりの生活となった。この教員の語るには、1904・明治37年に自己の修養をするのに都合の悪い、不便な地方をようやく出て、都会の学校へ転職することができた。月給は現在（1904-1905・明治37-38年）22円で高めではあるが、都会では物価もそれなりに高いため、結局余裕のない生活を続けている。

倹約は美德であったため、『教育界』に投稿したほぼ全員の教師が赤字が出ていないように収支を報告したが、付記を読めば、経済的困難が明らかになる。月給20円25銭をもらい、妻と3人の子女との5人暮らしで生活する、和歌山県海草郡のある小学校長は次のように述べた。

予は時あつて、酒は二三盃飲むが、煙草は一ぷくも吸はない、且つ学校内に設けてある無料の教員住宅に居るから、少しの貯金が出来るものゝ、若しも屋賃がいり、其の上はぎやりリを賞玩し、二三合の酒量があれば、それこそ借金の淵に身を沈めねばならぬのである²⁰

20円は教師の給料として高めだが、この例が示すように、5人家族を支えるには足りるか足りないかという状況である。無料の宿舎はこの校長の助けであるが、病

人が生じたり、子供が進学したり、親の世話が必要となるなど、非常事態には家庭が困窮してしまう。ある教員の言葉を借りれば、「家族の四五人もあつて、二十円以下の小学教員諸君には同情の涙に堪へぬのである」²¹。また、無住の寺院を無料で借りて、野菜を自家栽培する、家族7人の田舎教師はこのように言う。「私は酒も煙草も飲まない、それに長女（十八年）長男（十五年）の二人の教育も出来ぬ、涙を吞んで奉公させて居る」²²。自分の子供を進学させることができない、余裕のない生活を送らざるを得ない教師たちは、師範学校卒として地方の知的なエリートでありながら、その優越した地位を物質的に体現できないことを痛感して自分の生活を嘆いた。

しかし、最も困難だったのは、師範学校を出ていない准教員や代用教員だった。彼等の給料は8～10円で、正教員の半分ぐらいだった。准教員の多くが独身だったのは、薄給ゆえに仕方のないことだった。茨城県真壁郡のある小学校准教員の例を取り上げる。この独身の教師は自分のことを「決して頓着せず、決して有形的の報償は願はざるものなり」²³と言い、珍しく赤字を明示する次の生活費を報告した。

収入	月俸	8円
支出	書籍費（重に教育書類、及び理科書類）	1円
	新聞（国民（雑誌）『教育界』『日本之小学教師』『写真画報』『帝国百科全書』『普通学問投書』）	1円55銭
	下宿料	5円20銭
	刻煙草（巻煙草は一切喫せず）	60銭
	菓子代（親友来訪の時のみ）	50銭
	被服料の一部（襯衣、ツボン下、足袋、其他）	1円
	石鹸、齒磨、状袋（以上自製）半紙は1点1 銭5厘のものに限る	8銭5厘
	計	9円93銭5厘
差引残金	計	-1円93銭5厘

「茨城県真壁郡某尋常高等小学校准指導某君」の生活費投書（『教育界』4巻6号（1905・明治38年4月）87-88頁）を執筆者が整理した。

この教師は書籍費・新聞だけは確保する熱心な読者であるとは言え、雑費欄はなく、何の余裕もない生活を送っていても、毎月ほぼ2円が不足してしまう。投稿者が付記したように、

其の不足額及び臨時費は、日曜日を利用し、郷里の母親に迫り無心することゝせり、被服の大部支給も又同じ、若し一定の俸給を以て一切を賄はんとせば、其の苦心や思ふべし。²⁴

この教員と同様に、親から衣服や野菜、お金をもらうケースは多い。実家から学校に通うことで支出を抑える若い教員もいた。また、「尋准教員の免許状もあるが、今は専科訓導として図書を教授」する19歳の青年の一人は、下宿料が少なく、「懸賞文の応募などで、賞金が舞ひ込む」²⁵ものの、毎月1円37銭の赤字が出ると報告した。さらに座敷8畳一間で、妻と子供2人と一緒に住む、月給10円の准教員の投稿もあるが、彼等は生き延びるだけで精一杯だと言ってもいい²⁶。総じて『教育界』の生活費の調査は、小学校教師の困窮した状況を露にした。

収入を増やすために、授業の時間以外、家庭教師や、区長の手伝い、裁判の代書の仕事をするのは多かった²⁷。田んぼや畑があれば、野菜を栽培したり鶏を飼ったりすることで生活費を抑える教師たちもいた。多忙と経済的な困難は教師の体を崩し、深刻な健康問題をもたらした。ことに肺結核は教師と青年の間に流行った病で、結核の知識が高まった明治30年代後半から、教育雑誌ではほぼ毎月一つか二つの記事がこの問題を取り上げた。田山花袋の『田舎教師』の主人公も肺結核で死んだのは、象徴的である。

以上に描写した田舎教師の生活は暗くてわびしい。もちろん、下層出身者にとっては教師になって月給をもらうのは社会的な昇進であったと言える。また、ある程度財産と土地に頼れる田舎教師には、農業と比較的安定した月給を得られる教職の両立が望ましかったと考えられる。しかし、田舎の小学校教師の多くは、高等小学校以上の卒業者として地方の知識人ではあるが、高等教育への進学やもっと大きな希望を抱いていた。周辺に閉じ込められたという強い意識を持つ教師たちは、一方では、高等小学校や中学校、給料の高い地域の学校、実業界への転職を狙った。他方では、自分の生活や思想感情を、同じ境遇にある教師たちと共有し合うことで、自分の存在を知らせ、生きがいと地方教育の価値を見つける必要性を感じた。明治30年代のジャーナリズムと文学、ことに教育雑誌と教育小説は、この必要性に答えたと言っていいだろう。先に挙げた二人の小学校教員の一か月収支にみられた、「図書費」や「書籍費」、「新聞」という項目が設けられていたように、予算の制限にもかかわらず、読書のためのお金が常に配分された。毎月3円も新聞と雑誌、書籍に使う鳥取県の田舎教師は、「新聞雑誌代は多過ぎると見らるゝでせうが、田舎の淋しい下宿屋の生活に対する唯一の朋友であります」²⁸と述べ、読書の重要性を表現した。1901・明治34年に師範学校を卒業した福山県の地方教員は「或る事情

のため独身にて、下宿屋の四畳半に、新聞や雑誌を無二の友として居る」²⁹と書いた。「書を買ふが何よりの楽しみだ」³⁰という代用教員の言葉が明確に示しているように、「田舎教師」たちにとっては書籍と特に雑誌が一つの救いであった。小学校教師群は明治後半に新しい文学読者層を形成したのだが、教師たちが何をどのように読んだかは、以下にもう少し詳しく検討する。

4. 「田舎教師」が形成した読者層

「田舎教師」たちは、一方では、立身出世と精神性の涵養、知的な共同体の一員としての自己確認を求める青年層の中の重要な集団であった。たとえば、『教育界』に投稿された生活費報告を検討すると、明治30年代に急増した中等教育レベルの青年を対象とする雑誌『中学世界』や『女学世界』が教師たちの間でも読まれていたことが分かる。また、中学講義録や大学講義録を購読する教師たちも少なくなかった³¹。地方の特に若い小学校教師たちは、青年学習雑誌や講義録を通して教育の世界と同時代の若者につながりつつ、苦学や独学によって夢を追いかけようとした青年層の一部を形成したと言える。しかし、他方では、「田舎教師」たちは中間教育青年たちとの共通点を持ちつつも、小学校教員として特定の読者層を形成したことも強調すべきである。青年読者層一般と地方教員読者群の読書習慣の差異を最もはっきりと表すのは、教師たちのほぼ全員が教育雑誌を購読したことである。

永嶺重敏が論文「田舎教師の読書共同体」で論証したように、地方の知識人として孤立した生活を送った明治30・40年代の小学校教員は、教育雑誌を主たる読書対象とすることで、自分の教師としてのアイデンティティーを確立して、教師の共同体を構築することができた。教師の読書習慣の一つの特徴は、読書が教員共同体の中で組織されたことである。各地で自発的に形成された教員読書会は一つの学校内で、あるいは複数の学校をまたいで教員を集め、大小様々な規模でそれぞれ異なる多様な活動を展開しながら組織されていた。そこでは教員は会費を払い、共同購入した雑誌を回読し、毎月1・2回集合して話し合うというのが一般的であった。教員読書会で読まれたのは何よりもまず教育雑誌であった³²。

教育雑誌は、全国を市場とする商業ベースの民間教育雑誌と、特定地域を基盤とする地方教育雑誌の二種に大きく分類できるが、明治時代を通して、民間企業が出版した教育雑誌は189誌も数えられる³³。明治30年から45年までに創刊された民間教育雑誌は99誌にも及び、この時期は特に教育雑誌の増加が著しかった³⁴。しかも、明治30年代に創刊された教育雑誌はそれ以前と比較すると長期に刊行されることになる雑誌が目立つ。これは、教育雑誌の市場が拡大したのと同時に安定化

したからでもある。雑誌の発行部数も増加し、読者群がどんどん拡大した³⁵。

沖縄から北海道までの教員を対象とするこれらの教育雑誌は、全国に広がる個々の教師たちに一つの教師集団に属するという意識を成立させた。また、地方教育会雑誌は同じ機能を地方のレベルで果たした。県レベルの教育会もあれば、市レベルなどの教育会もあったが、小学校教員はおおむね全員が教育会に参加した。地方教育会の雑誌は、その地域のほぼ全教員に読まれたと考えてよい。教員読書会と地方教育会という教師を中心とする地元の組織と、全国の教師を束ねる民間教育雑誌が存在したが、それは規模の小大にかかわらず、教師の共同体として機能し教師であることの価値と生きがいを確信させる役割を演じた、と永嶺は明確に論じた。

ここで付け加えなければならないのは、教師たちが熱心に文学も読んだということである。永嶺は、一方では、教師の購読雑誌の「大半は教育雑誌で占められていた」ということを主張し、「授業のため、文検のためというきわめて実際的な読書か、あるいは修養のための読書しか小学校教員たちは知らなかった」と結論した³⁶。しかし他方、文学と教育の間には無視できない関係があることを論文のところどころで暗示していたのである。例えば、教育雑誌以外、『少年園』や『日本の女学』、『東洋学芸雑誌』、『大家論集』、『国民の友』、『太陽』、『ローマ字世界』といった総合雑誌や文芸雑誌も、教師が読む雑誌の例に挙げられている。教師たちが俳句雑誌『ホトトギス』の購読者層の重要な一部を形成し、この雑誌に積極的に作品を投稿した事実も指摘されている。その上で、地方の教育会雑誌が「会員からの投稿短歌・俳句欄や懸賞論文の募集等まで」行ったことや民間教育雑誌上でも「文学・小説への理解の必要性がしばしば説かれ」たことも指摘されている³⁷。このように当時の状況を検証してみると、地方教員が新たな文学読者層も形成したことが見えてくる。

5. 「田舎教師」たちの文学的志向

明治後半における「田舎教師」群の登場が新たな文学読者層の誕生であったことは上に指摘したが、以下に、教師たちが読んだ文学を具体的に紹介し、そこから彼らの文学傾向を探っていきたい。

小学校教員のほぼ全員が教育雑誌を読んだとすれば、まず教育雑誌に掲載された文学作品にはどのようなものがあったのかに注目する必要がある。広く読まれた『教育界』や『教育時論』、『教育実験界』、『教育学術界』という全国を市場とする民間教育雑誌は、いずれも文芸欄を設け、文学に関する記事や詩歌（短歌、俳句、新体詩）、漢詩漢文、日記、小説などを提供した。特に『教育界』は文学に熱心で、

1901・明治34年から1904・明治37年までの間に短編小説を23編も掲載した。その執筆には幸田露伴や国木田独步、柳川春葉、小栗風葉の他に、新進世代の作家であった正宗白鳥や永井荷風、三島霜川もいることが目を引く。他方『教育実験界』と『教育学術界』は1907・明治40年前後に「教育小説」と銘打った教師向けの短編小説を載せたが、その内『教育実験界』の何編かは教師たち自身の投稿小説を載せたことを特徴とする。無論、これは教師が全員文学熱狂者だったということの意味はしないし、教育雑誌が実用的な目的で読まれたことはいうまでもない。しかしながら、多くの教育雑誌に文芸欄が設けられていたことは、読者である教師たちが文学を求めたということを示している。そして、教育雑誌しか読まなかった教師にしても、それを通じて必ず文学との出会いを持ったことになる。

明治末期に、小学校教員と彼らの地方での生活ぶりを題材とし、小学校教師たちを主な読者対象とした「教育小説」という新たな文学ジャンルが流行したことも教師たちの文学読書習慣を立証する。単行本としては『教育小説』（金港堂、1902・明治35年）や蓮実珂川の『村夫子』（育成会、1908・明治41年）、小泉又一の『教育小説 葉石』（同文館、1907・明治40年）、石川栄司の『理想の小学教師』（育成会、1906・明治39年）などの例を上げることができるが、多くの教育小説は教育雑誌に掲載された。国家と天皇に尽くす教師を描く教育小説もあれば、公教育制度と近代社会、国家に内在する矛盾を具体的に示して批判する教育小説もあり、雑誌によっても異なる特性を持つジャンルであった。

教師たちが教育雑誌の他に、総合雑誌や文芸雑誌も購読したことを既に第4節で指摘したが、以下では雑誌『教育界』が1908・明治41年に行った教師たちの読書調査をもとに、教師たちが読んだ作品を具体的に見ながら彼らの反応を探りたい。『教育界』の編集者は「去年来読みたる書籍」の投稿を呼びかけ、28名の教師たちがこれに答えた。そして彼らが読んだ図書や雑誌のリストが1908・明治41年2月に「教育茶話」欄で報告された³⁸。28名のうち17名は、教育論や心理学、倫理などについての書籍の他に、文学作品を取り上げた。その文学作品の中には、『教育小説 葉石』（6名）と『理想の小学教師』（4名）という、当時人気を集めた教育小説があった。これらの教育小説は理想的な教師像を描く、道徳的なものとして位置づけられるが、教師たちが加えた評価は次のようである。ある教師は、「理論よりも實際を貴ぶ」³⁹と述べて、無味乾燥な教育議論よりも物語という形式の方をよしとして好意的に評価しているが、ある教師は「書き方の文妙ならず」⁴⁰と評し、もう一人は「著者の理想はあまりにかたよりたりを感じたり」⁴¹と批判した。この最後の意見を述べた投稿者が『吾輩は猫である』の大ファンだったことを考慮すればどういう傾向の持ち主だったかが分かるだろう。教師の読書は決して实际的で修

養を目的とするばかりとは言えない。たとえば、教師たちが読んだ作品としてあげられている中には徳富蘆花『思ひ出の記』(2名)、『楞牛全集』(2名)、夏目漱石『吾輩は猫である』(2名)、木下尚江『懺悔』(1名)、島崎藤村『破戒』(1名)、これらは果たして健全な図書と言えるだろうか。この調査が示すのは、教師が教職に関する読物ばかりでなく、文学もよく読んだことと、彼らに読まれた文学作品には教育的道徳的な小説とは全く異なるものも含まれていたことである。

教師たちの文学熱は明治30年代の師範学校における文学活動からもうかがえる。教育研究者の石戸谷哲夫が論じたように、小説や雑誌、新聞の読書さえ禁止したあまりにも厳しい軍隊的な明治20年代の「森式師範教育」とは対照的に、明治30年代には師範学校は児童・学生を中心とする開発主義的な教育思想に転換し、文学と演劇も許可する「ルネサンス」を見た。石戸谷は数多くの例を挙げているが、たとえば明治30年代前半には東京府師範学校の生徒の間で、赤津隆助(1902・明治35年卒)等を中心とする以文会という文芸サークルが作られた⁴²。この文芸サークルは明治末期になると学校当局からの圧迫を受けて解散したが、明治30年代には文芸に対してやや寛容な風潮を示す。また、岡山県師範学校を1906・明治39年に卒業した岡崎勉という人物は当時の生徒たちの間での文芸熱の高まりについて次のように述べた。

生徒間にて愛読されし文学ものは桂月、蘆花、紅葉、涙香等の作にして後には漱石に及び、小説中幸田露伴の「天うつ浪」、小杉天外の「魔風恋風」等は最も行はれ、殊に後者の中心女性初野さんはいたく青春の血を涌躍せしめ、為に読売新聞は各室に購読され、当時の一年生が室長殿から「新聞の持ち帰りが遅いぞ」と怒鳴られたる程熱心なるもありき⁴³

さらに熊本県師範学校に1906・明治39年に入学した内田伝蔵という人物の証言では、生徒の間に「星と董」の「軟文学」が盛んであった⁴⁴。また、秋田県師範学校の歴史を語る『創立六十年』という冊子では卒業生による回想が数多く集めたが、その文章からも、文学に熱心な生徒たちが少なくなかったことが分かる⁴⁵。

最後に、単に文学を読むだけではなく、教育現場で文学作品を教材として使う運動も誕生したことが指摘できる。たとえば、長野師範学校に続いて東京高等師範学校を卒業した後に小学校教員になった樋口勘次郎は、子供の自発活動を尊重して活動主義を説き、教育論でも、また実際の授業でも文学を教材として活用することを進めた。

終わりに

本論文では明治後半に「田舎教師」たちが出版物の熱心な消費者として特殊な読者層を形成したことを論証した。教育史的な背景を参照しつつ教師たちの日常生活や読書習慣を明確にすることで、本論文では、これまで強固に形成されてきた単純な「田舎教師」というステレオタイプを乗り越える試みを行った。そして、確かに周辺的であるかもしれないが、中間知識人として地方の知的なエリートでもあった教師たちについての理解を深め、彼ら・彼女らにとって当時の出版メディアと文学が持った意味と役割を理解する端緒とした。さらに、地方教員を主な読者対象としたり、地方の教員生活をテーマとする文学作品の登場も指摘した。明治30年代に地方教員すなわち平凡で周辺的な人物と彼らを取り巻く環境を舞台に取り入れるようになることで、日本文学は一つの重要な転換を見たと考えられるが、地方教員読者層と近代文学の成立過程については、また別の論文で詳しく論じることとする。

注

- 1 永嶺重敏「田舎教師の読者共同体」『出版研究』25号（1994年）、96頁。
- 2 和田敦彦『読むということ——テキストと読書の理解から』ひつじ書房、1997年。和田敦彦『メディアの中の読者——読書論の現在』ひつじ書房、2002年。
- 3 文部省『学制百年史 資料編』帝国地方行政学会、1972年、496-497頁と490-493頁をもとに論文筆者が計算した。
- 4 同上471頁。
- 5 陣内靖彦「明治後期における師範教育の制度化と師範学校入学生の特質」石戸谷哲夫、門脇厚司（編）『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981年、126頁。
- 6 同上142-149頁。
- 7 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1967年、331頁。
- 8 唐澤富太郎『教師の歴史——教師の生活と倫理、典型的教師群像』ぎょうせい、1989年、29-34頁。
- 9 国木田独歩『定本国木田独歩全集』増訂版、3巻、学習研究社、1978年、42頁。
- 10 陣内、前掲、124頁。
- 11 同上127頁。
- 12 夏目漱石『漱石全集』2巻、岩波書店、1994年、289頁。
- 13 文部省、前掲、493-490頁。
- 14 『教育実験界』の教育小説における女性教員に対する軽蔑的な眼差しについては、和田『読

むということ』、前掲、210-222頁を参照。

- 15 赤水生「投書」『教育界』1巻7号（1902年5月）124頁。
- 16 石戸谷、前掲、230-231頁。唐澤、前掲、151-152頁。
- 17 「三十七、千葉県君津郡某尋常高等小学校首席訓導某君」『教育界』4巻7号（1905年5月）99頁。『教育界』4巻に掲載された全58件の生活費の報告書に番号が付けられていたが、この投書は37番目の投書であった。以下は同様。
- 18 「四十四、福井県今立郡某小学校訓導某君」『教育界』4巻8号（1905年6月）92頁。
- 19 「六、長野市某尋常高等小学校訓導某君」『教育界』4巻4号（1905年2月）98頁。
- 20 「四十九、和歌山県海草郡某尋常高等小学校校長某君」『教育界』4巻9号（1905年8月）94頁。
- 21 「三十三、富山県某尋常高等小学校訓導某君」『教育界』4巻7号（1905年5月）96頁。
- 22 「三十五、奈良県宇陀郡某尋常小学校（単級）訓導某君」『教育界』4巻7号（1905年5月）98頁。
- 23 「二十八、茨城県真壁郡某尋常高等小学校准訓導某君」『教育界』4巻6号（1905年4月）87頁。
- 24 同上88頁。
- 25 「五十六、三重県度会郡某男子高等小学校専科訓導某君」『教育界』4巻9号（1905年7月）98-99頁。「尋准教員の免許状」は尋常小学校の准教員免許を指す。
- 26 「五十七、福島県信夫郡某尋常高等小学校准訓導某君」『教育界』4巻9号（1905年7月）99頁。
- 27 唐澤、前掲、151頁。
- 28 「五十五、鳥取県八頭郡某尋常小学校訓導某君」『教育界』4巻9号（1905年7月）98頁。
- 29 「三十三」、前掲、96頁。
- 30 「四十八、長野県南女壘郡某小学校代用教員某君」『教育界』4巻8号（1905年6月）94頁。
- 31 明治20年代から講義録を出版する会の組織化に関しては、竹内洋『立身出世主義』（世界思想社、2005年）の「第6章 田舎青年の煩悶」を参照。
- 32 永嶺、前掲、101-103頁。
- 33 寺崎昌男他「明治後期における教職意識の展開」『立教大学教育学科研究年報』17号（1974年）17-18頁。
- 34 寺崎、前掲、17-18頁。有木良彦「戦前日本の教育雑誌についての集計」『国立教育研究所研究集録』8号（1984年）51-52頁。
- 35 明治31年には大きな教育雑誌では発行部数が5,000～6,000部であったが、大正5年には10,000部にも至った。永嶺、前掲、107-108頁。
- 36 同上105頁、115頁。

- 37 同上 107 頁、116 頁。
- 38 『教育界』7 卷 4 号（1908 年 2 月）60-74 頁。石戸谷（前掲、329-330 頁）もこの調査に言及したが、ここではより詳しく分析した。
- 39 愛水生「其の十六」『教育界』7 卷 4 号（1908 年 2 月）66 頁。
- 40 松田実男「其の十七」『教育界』7 卷 4 号（1908 年 2 月）67 頁。
- 41 三宅美山「其の十五」『教育界』7 卷 4 号（1908 年 2 月）66 頁。
- 42 石戸谷、前掲、322-323 頁。
- 43 引用は石戸谷、前掲、323 頁より。
- 44 石戸谷、前掲、323 頁。
- 45 秋田県師範学校編『創立六十年』秋田県師範学校、1933 年。